

寺に有來候撞鐘に而、時之鐘撞候義、願之通御聞届不苦筋と存候、

〔長崎志三〕時之鐘鑄造之事

一寛文五乙巳年時之鐘鑄造有之、島原町内ニ鐘撞所を建らる、七月十日成就し、同八月十二日掛置る所、翌年撞破るニ付、同年六月十八日鑄直さしむ、

鐘高三尺五寸 口指渡二尺五寸五分 重サ九百斤

〔經國集十〕同和惟逸人春道秋日臥疾

吹螺山寺曉鳴磬谷風餘略

滋善永略中

〔權記〕寛弘五年九月二十五日壬午、此夕女人有惱氣、疑在産事略中子時螺吹後、僧都慶被出、同載

歸、

〔枕草子六〕法師の坊に、おのこ共わらはべなどゆきて、つれづれなるに、たゞかたはらに、かひをいとたかく俄にふき出したるこそをどろかるれ、

〔枕草子春曙抄六〕かひをいとたかく 昔は十二時に貝を吹し也

〔台記〕久安三年六月十八日庚戌詣中堂延曆寺先之上皇崇德參御略中次御修法初夜了、兩院崇德鳥羽

見夏衆酌水還御、余藤原丑螺後歸休廬

〔千載和歌集十八〕山寺にまふでたりける時、貝吹けるを聞てよめる、 赤染衛門

けふも又午の貝こそふきつなれ未のあゆみ近付ぬらん

〔吉野詣の記〕やどいで、五のかひをふくからにこ、は六田のかすむ青柳二年三月五日事係天文二十

〔多聞院日記〕弘治元年十二月十二日、高田城へ何方ヨリトモナク、廿餘人辰貝ノ過ニ、朝日ミニ打

入、家城悉放火、入衆十三人討死了、

〔文德實錄九〕天安元年十月戊子、陰陽寮持行漏刻鼓、自鳴三度、十一月乙未、持行漏刻鼓、又自鳴三

官司置漏刻